

式 辞

(ふるさとを次の世代に引き継げるよう全力で頑張りましょう)

鳥取県町村会長 宮 脇 正 道

本日、ここに、鳥取県町村会創立100周年記念式典を挙行しましたところ、平井鳥取県知事、荒木全国町村会長、内田鳥取県議会議長、谷口鳥取県町村議会議長会長をはじめ、ご来賓の皆さまには、ご多用中にも拘わらずこのように多くの方のご臨席をいただき、厚くお礼を申し上げます。

大正9年、「鳥取県町村長会」が創立後、戦後、昭和22年の地方自治法制定に伴う「鳥取県町村会」への改称を経て、令和2年10月に100周年を迎えましたが、新型コロナウイルス感染症の流行もあり、本日の開催となりました。

この100年余の間には、太平洋戦争と戦後復興、高度経済成長と人口の都市部への集中、環境問題、そして少子高齢化の進展に伴う人口減少、地球温暖化、頻発する地震や台風、集中豪雨による大規模災害等、様々な出来事や課題がございましたが、それ等を乗り越え、本日、この式典を迎えることができたのは、歴代会長、そして諸先輩の皆さまの弛まざる努力の賜物であり、我々が現場で頑張れるのも、諸先輩のご足跡から学び、県及び全国町村会等、関係各位のご指導、ご支援あつてのことです。心から敬意と感謝の意を表します。

さて、私たちは、現在、SDGs、脱炭素、デジタル社会の推進など、新たに展開すべき課題を抱える一方で、この2年間は、コロナウイルス感染症と闘い、2月からは、ロシアによる核威嚇付きのウクライナへの侵攻という事態に直面し、国政の間では、我が国のあるべき姿について、憲法改正も含めた議論が加速しています。

このような状況の中、私は、足尾鉍毒事件で環境と住民の権利のために尽力した田中正造の日記に書かれていた今から110年前の文言、「真の文明は 山を荒さず 川を荒さず 村を破らず 人を殺さざるべし」を思い起こしています。直接的には、鉍山の採掘作業により周辺の山川（やまかわ）が荒れ、川の魚は死に、川が氾濫すれば農作物が全滅する被害が多発し、人を死に至らしめるようなことは許されないということですが、100年以上経った今、何の知識や先入観なくこの文言

を見ても「山を荒さず」は、「環境の保全、脱炭素とそこでの営み」を、「川を荒さず」は「防災、安全、水」を、「村を破らず」は「地域の振興、和、共助」を、「人を殺さざるべし」は「そこに住む人々の安寧な生活と平和な社会」を思わせます。

このように考えると現代にも通ずる言葉であり、真理であると思っており、改めて心に刻んでおきたい言葉です。

設立時に１９１あった鳥取県内の町村数は、昭和、平成の大合併を経て１５町村となりました。合併されたところも単独で存続されたところも、取り組むべき課題はたくさんあります。これからも力を合わせて、住民福祉の向上を基本に、道路や学校、上・下水道等の社会資本の整備、人口減少対策、地域の振興など多様な事務を執行してまいらねばなりません。これからも力を合わせて、切磋琢磨し、助け合いながら、地域の発展に努めてまいりましょう。

この式典は、鳥取県町村会の１００周年を祝い、次なる１００年に向けて決意をする場でもあります。私たちの地域の持っている素材をしっかりと磨き、魅力を高め、愛すべきふるさとを次の世代に引き継げるよう全力で頑張りましょう。

ご来賓の皆さまの変わらぬご支援、ご協力を重ねてお願い致しますとともに、本日ご参集の皆さまのご健勝と、今後益々のご活躍を祈念し、式辞といたします。